

# 別れ霜

樋口一葉

青空文庫



## 第一回

莊子が蝶の夢といふ世に義理や誠は邪魔くさし覺め際まではと  
 ひき引しむる利慾の心の秤には黄金といふ字に重りつきて増す寶なき  
 子寶のうへも忘るゝ小利大損いまに初めぬ覆車のそしりも  
 我が梶棒には心もつかず握つて放さぬ熊鷹主義に理窟はいつ  
 も筋違なる内神田連雀町とかや、友轉りの喧しきな  
 らで客足しげき呉服店あり、賣れ口よければ仕入あたらし  
 く新田と呼ぶ苗字そのまゝ暖簾にそめて帳場格子にやに下るあ  
 るじの運平不惑といふ四十男赤ら顔にして骨たくましきは薄

すじやうゆ きかれひそだ  
 醬油の鱧鰈に育ちて世のせち辛さなめ試みぬ附け渡りの旦那株  
 とは覺えざりけり、妻はいつ頃なくなりけん、形見に娘只一人  
 親に似ぬを鬼子とよべど鳶が産んだるおたかとして今年二八のつば  
 みの花色ゆたかにして匂濃やかに天晴れ當代の小町衣通ひ  
 めと世間に出さぬも道理か荒き風に當りもせばあの柳腰な  
 とせんと仇口にさへ噂し連れて五十稻荷の縁日に後姿の  
 みも拜し得たる若ものは榮譽幸福上やあらん卒業試験の優  
 等證は何のものかは國會議員の椅子にならべて生涯  
 の希望の一つに數へいる、學生もありけり、さればこそ一たび  
 見たるは先づ驚かれ再び見たるは頭やましく駿河臺の杏雲  
 堂に其頃脳病患者の多かりしこと一つに此娘が原

と 因とは商人あきうどのする掛直かけねなるべけれど兎とに角其美かくそのびは争あらそはれず、姿すがたかたち

形

のうるはしきのみならで心こころぎまのやさしさ情なさけの深ふかさ絲竹いとたけ

の道みちに長たけたる上うへに手ては瀧たきもと本の流ながれを吸くみてはしり書がきうるはし

く四書五經ししよごけいの角かど々々しきはわざとさけて伊勢源氏いせげんじのなつかしき

やまと文明ぶみあけくれ暮ふづくゑ文机ふづくゑのほとりを離はなさず、さればとて香爐峯かうろほうの

雪ゆきに簾みすをまくの才女さいぢよめきたる行おこなひはいさゝかも無なく深窓しんそうの春はる

深ふかくこもりて針仕事はりしごとに女によしやう性の本ほんぶん分ぶんを盡つくす心こころ懸まことけ誠まことに殊し

勝ゆしようなりき、家いへに居あて孝かうじゆん順じゆんなるは出いでて必かならず貞節ていせつなりと

か、これが所夫をととと仰あふがれぬべく定さだまりたるは天下てんかの果報くわほうの一人ひとり

じめ前ぜん生しやうの功德くどくいか許ばかり積つみたるにかと世よにも人ひとにも羨うらやまるゝ

はさしなみの隣となりまち町まちに同どう商しやう中ちゆうの老舗しにせと知しられし松澤儀右まつざはぎ

衛門ゑもんが一人息子ひとりむすこに芳之助よしのすけと呼よばるゝ優男やさをとこ、契ちぎりは深ふかき祖先そせんの縁えんに引ひかれて櫛かしの實みの一人子ひとりこどうし同志どうし、いひなづけの約やく成立なりたちしはお高たかがみどりの振ふり分わけ髪がみをお煙草たばこ盆ぼんにゆひ初そむる頃ころなりしとか、さりとは長ながかりし年月としつき、ことしは芳之助よしのすけもはや廿歳はたちいまちり今いま一いち兩年やうねん経へたる上うへは公おほに夫おほとよび妻つまと呼よばるゝ身みぞと想おもへば嬉うれしさに胸むねをどりて友達ともたちの颯なぶりごとはづも恥はづかしく、わざと知しらず顔がほつくりながらも潮さくす紅くれないの我われしらず掩おほふ袖屏風そでびやうぶにいとゞ心こころのうちあらはれて今いま更さら泣なきたる事こともあり人ひとみぬひまの手習てならひに松澤まつざはたかとかいて見みて又また塗ぬり隠かくすあどけなき利發りはつに見みえても未通おほこぎ女氣こぎなり同じ心おなこころの芳之助よしのすけも射ある矢やの如ごとしと口くちにはいへど待まつ歳としつき月つきはわが爲ために弦ゆづるたゆみしやうに覺おぼえて明あかし暮くらす程ほどのまどろかしさよ、

たかどの 高殿に見る月の夕影を分つはいつぞとしのび、花の下ふむ  
 つゆ 露のあした双ぶる翅の胡蝶うらやましく用事にかこつけて折々  
 とひ の訪おとづれに餘所ながら見る花の面わが物ながら許されぬ一  
 がき 重垣にしみ／＼とは物言交すひまもなく兎角うらめしき月  
 きひ 日なり隙行く駒に形もあらば我れ手綱を取り鞭を揚げていそがさ  
 おも ばやとまで思ひ渡りぬ、されども天は美人を生んで美人を恵まず  
 おほ 多くは良配を得ざらしむとかいへり、彌生の花は風必ずさそ  
 じふごや ひ十五夜の月雲かゝらぬはまことに稀なり、覺束なしや才子佳  
 じん 人ががなべて待つ歡びの日のいつか來べき、あし分船のさはり  
 おほ 多き世なればこそ親にゆるされ世にゆるされ彼も願ひ此も請ひよ  
 ましん しや魔神のうかゞへばとてぬば玉の髪一筋さしはさむべき間も

見えぬを若此縁結ばれずとせばそは天災か將た地變か。

## 第二回

隴を得て蜀を望むは夫れ人情の常なるかも、百に至れば千  
 をと願ひ千にいたれば又萬をと諸願休む時なければ心常に安  
 ならず、つらく思へば無一物ほど氣樂なるはあらざるべし、  
 大抵が五十年と定まつた命の相場黄金を以て狂はせる譯には  
 行かず、花降り樂きこえて紫雲の來迎する曉には代人料にて  
 事調はずとは誰もかねて知れたる話、鶴千年龜萬年人間常  
 住いつも月夜に米の飯ならんを願ひ假にも無常を觀ずるな



り同舅あひやけどうし同士ふそくなり不足しなの品もあらば持ち給たまへと彼方かなたにばかり親切しんせつ  
 を盡つくさして引入ひきいれし利りも少すくなからず世よは塞さいをう翁がうがうまき事ことして幾い  
 くとせ歳あさひすぎし朝日あさひのかげ昇のぼるが如ごとき今いまの榮さかは皆みな松まつ澤ざはが庇護かげなるも  
 のから喉のどもと元もとすぐれば忘わするゝ熱あつさ斯かく對たい等とうの地位ちゐに至いたれば目め  
 うへこぶ上の瘤こぶうるさくなりて獨ひとりつく／＼案あんずるやう徑けい十じ町ちやうを距へだ  
 てぬ處ところに同どう商しやう業げふを營いとむが上うへに彼かれは本家ほんけとて世よの用もちひも重おもか  
 るべく我われとて信しん用よう薄うすきならねど彼方かなたに七しち分ぶの益えきある時ときこゝには  
 わづさんぶ僅さんぶかに三分さんぶの利りのみ我わが家いへ繁はん榮えい長ちやう久きうの策さくは彼かれ松まつ澤ざはの無な  
 きにしかず且かつは娘むすめの容きり色やう世よに勝すぐれたれば是これとても又また一つの金か  
 ねぐらよしのすけ庫く芳ほう之の助すけとのえにし絶たえなば通とほり町ちやうの角かど地ぢ面めん持ぢ參さんの聲むこもなき  
 にはあらし一いつ擧き兩りやう得とくとはこれなんめりと思おもふ心こゝろは娘むすめにも祕ひめ

どうきもと 同氣求むる 番頭の 勘藏にのみ割て明かせば横手を拍つて賛  
 成し主 從 日夜額をあつめて其方法を講じ居たりき、時な  
 る哉松澤はさる歳 商法 上の都合に依り新田より一時借り  
 入れし二千許の金ことしは既に期限ながら一兩年引つゞき  
 ての不景氣に流石の老舗も手元豊かならず殊に織元その外にも  
 仕拂ふべき金いと多ければ新田は親族の間 柄なり且は是  
 迄我が方より立かへし分も少からねばよもや事情打あけて延  
 期を乞はゞゆるさじと言ひもすまじ他人に内 兜を見すかされ  
 機械仕掛のあやつり 身 上 松澤ももう下り坂よと囃されんは  
 口惜しく脊なる新田は後廻し腹の織元其他へ有金 大方  
 取あつめて仕拂ひたる噂こそ耳よりのことなれと平生ねらひすま

せしましかなた的えんき彼方より延期をいひ出さぬ間に、切きつて放はなして急きふさいそく催促いに言い  
 ひひわわけけ 譯ほどすべき程もなく忽たちまち表おもてむ向むきの訴そし訟しよう沙さ汰たとは成なれりける素もと松ま  
 つつぎぎはは 澤すだいは數代の家柄いへ世よの信しん用ようも厚あつければ僅きん々く千せんや二に千せんの金かね何い  
 づづかたかた 方たうにても調てう達たつは出で來きう得べしと世せ人じんの思おもふは反うらう對へにて玉たま子ごの  
 四しかく角かくまだ萬ばん國こく博はく覽らん會かいにも陳ちん列れつの沙さ汰たをきかねど晦み日そかに月つき  
 の出でる世よの中なか十五じふご夜やの闇やみもなくてやは奥おくは朦もう朧ろうのいかなる手しゆだ  
 段だんありしか新に田たが畫くわ策さく極きくめて妙めうにしていさゝかの融ゆう通づうも  
 ならじだんず示し談だんを請こはゞやと奔ほん走そうせしかどそれすらも調とはのずして新に  
 つたつたは首しゆ尾びよく勝かちを制せいし凱かち歌どきの聲こゑいさひきましく引ひ揚あげしにそれとか  
 はりて松まつ澤ざはが周しう章やう狼らう狼らうまこと寐ね耳みに出で水みづの騷さう動どうおどろく  
 といふ暇ひまもなく巧たくみに巧たくみし計けい略りやくに争あふかひなく敗はい訴そとなり

家藏いへくらのみか數代すだい續つゞきし暖簾のれんまでも皆みなかれが手に歸きしたれば木きよ  
 り落おちたる山猿やまざる同様どうやうたのむ木蔭こかげの雨あめ森もり新しん七しちといふ番頭ばんとうの  
 しろねづみ 去年きよねん生しやう國こくへ歸かへりし後のちは十露盤そろばん玉たまと筆ふで先さきに帳ちやうじ  
 白鼠しろねづみ 尻りつくろふ溝どぶねづみ鼠ねづみのみなりけん主家しゆか一いち大事だいじの今日こんにちも申まをし  
あは合せたるやうに富士見ふじみ西さい行さいぎきめ込み見返みかへるものさへあらざ  
 れば無念むねんの涙なみだを手荷物てにもつにして名なのみ床ゆかしき妻戀つまこひ坂下さかした同朋どうぼう  
う町まちといふ處ところに親子おやこ三人さんにん雨露あめつゆを凌しのぐばかりの家いへを借かりて辛からく膝ひざ  
 をば入いれたりけり、海うみならず山やまならぬ人じん世せいの行路かうろ難なん今いま初はじめて思おも  
あたひ當ふちり淵瀬ふちせことなる飛鳥あすか川がはの明日あすよりは何なにとせん、もと富家ふかに  
ひと人ひととなりて柔弱にうじやくにのみ育そだちし身みは是これと覺おほえし藝げいもなく手てに  
そろばん十露盤とは取りならへど物ものに當あたりし事ことなければ時ときの用ようには立たちもせ

ず坐して喰へば空しくなる山高帽子半靴と明日かぎりし身の  
 廻りも一つ賣り二つ賣りはては晦日の勘定さへ胸につかふる  
 程にもなりぬ。

## 第三回

一人並の男になりながら何の腑甲斐ない車夫風情にまで落  
 魄ずともいちにんなみをとこの事外ことほかに仕様のあらうものをと大言吐きし昔の心の  
 恥かしさよ誰れが好んで牛馬の代りに油汗ながし塵埃の中  
 馳せ廻るものぞ仕様模様の竭きはてたればこそ恥も外聞もな  
 ひまぜにからめて捨てた身のつまり無念も殘念も饅頭笠のう

ちに包みて参りませうと聲低に勧める心いらぬとばかりもぎだう  
 に過ぎ行く人それはまだしもなりうるさいはと叱りつけられて我  
 知らずあとじさりする意氣地なさまだ霜こほる夜嵐に辻待の  
 提燈の火の消えかへる迄案じらるゝは二親のことなり馴れ  
 ぬ貧苦に責めらるゝと懐舊の情のやる方なさとが老體の毒  
 になりてや涙がちに同じやうな煩ひ方それも御尤もなり我さへ  
 無念に腸の沸え納まらぬものを胸さける程にも思召すなるべし  
 憎きは新田なり恨めしきは運平なりよしや血をすゝり肉をつく  
 すとも鑿るべき奴ならずと冷凍る拳握りつめて當處もなしに睨  
 みもしつ思ひ返せばそれも愚痴なり恨みは人の上ならず我れに男  
 らしき器量あらば是れ程までには窮しもすまじアと歎ずれば

吐く息しろく見えて身を切る夜風に破れ屏風の内心配になり  
 て絞つて歸るから車財布のもの、少き程苦勞のたかの多くなり  
 てまたぐ我家の鬩の高さ、ア、お歸りかと起返る母、お父さん  
 は御寢なツてゞすかさぞ御不自由で御座いましたらう何もお變り  
 は御座いませんかと裏問ふ心は疵もつ足、オ、お前の留守に差配  
 どのが見えられてといひさしてしばた、く瞼の露白岡鬼平とい  
 ふ有名の無慈悲もの悪鬼よ羅刹よと蔭口するは澁團扇の縁  
 はなれぬ店子共が得手勝手家賃奇麗に拂ひて盆暮の砂糖袋  
 あましる吸はし置かば下ぐる目尻と諸共に眉毛の名によぶ地  
 甘き汁さへ吸はし置かば下ぐる目尻と諸共に眉毛の名によぶ地  
 蔵顔にも見ゆべけれど、今の身の上には憎くし剛慾もの事  
 情あくまで知りぬきながら知らず顔の烟草ふかく身に過りあ

ればこそ疊たみひたひに額うづほり埋うづめて歎たんぐわん願ねがも吹ふ出いだす烟けむりの輪わと消けして、  
 言いひ譯わけきく耳みみはなし家賃やちんをさめるか店たなを明あけるか道みちは二ふたつぞ何方どちら  
 にでもなされとぽんとはたく其煙管そのきせるで打うちわつてやりたい面つらがまち  
 もくてき目的もくてきなしに今日けふまでと日ひを延のべしは重ぢゆうく々こなた此方こなたが悪わるけれど母は  
 上うへとらへて何言なにひを居をつたかお耳みみに入いれまいと思おもへばこそ様さま々々  
 の苦勞くらうもするなれさらでもの御病氣ごびやうきにいとゞ重おもさを添そへたやう  
 なものはて困こまつたと言いひはせて低頭うつぶく心思案こころをあんにくれぬ、差配さはいどの  
 が見みえられてと母はは詞ことばを繰くりかへ返かへして何か譯なには知わらねど今直いまぐに此こ  
 家ゝを立たて一いつ寸すんの猶豫ゆうよもならぬとそれはく畫ゑにもかゝれぬ談だんじ  
 やうお前まへにも料簡れうけんあることゝやうやうに言延いひのべて歸かへります迄までと  
 頼たのんでは置おいたれどマアどうしたら宜よからうか思案しあんして見みてくだ

されと小聲こごゑながらもおろく涙なみだお案あんじなされまますな何どうにかなり  
 ます今夜こんやは大分だいぶん更ふけましたから明日あした早さう々く出向でむきまして談はなし合あひ  
 をつけませう十二じふに少すこしの行ゆき違ちがひでそれほどの事ことでは御座ございませ  
 んと我わが親おやにまでいつはるとはさても後のちのよ恐おそろし、寢ねぬに明あ  
よあがるすくる夜明よあけ鳥がらすもこうと鳴なきて反哺はんぼの教をしへとなるものを生いき甲斐がひなや五ご  
しやく尺みの身みに父母ふぼの恩荷おんなひ切きれずましてや暖簾のれんの色いろむかしに染そめか  
 へさんはさて置おきてうして朝あ暮ぼ三さんのやつくしきにつくう浮世うきよい  
 やになりて我身わがみ捨すてたき折をり々くもあれど病やみ勞つかれし兩親ふたおやの寢顔ねがほ  
のぞさし覗のぞくごとに我われなくば何なんとし給たまはん勿體もつたいなしと思おもひ返かへせど沸わ  
なみだくは涙なみだか藥くすり鍋なべの下炭火したすみびとろくと消きえ勝がちの生計くらしとて良醫りやういの  
 手てにもかゝられねば見みすく重おもり行ゆく心こころぐるしきよ思おもへば天てんも地ち

も神かみも佛ほとけも我わが爲ためには皆みな仇あだか今いまこの場ばあ合ひを見みすぐしにするとは何なん  
 の事ことぞ新田にったこそ運うん平べいこそ大だい悪あく人にんの骨こつちやう頂むすめなれ娘むすめばかりはよ  
 もやと思おもへどそれおももこれこゝろも心まよの迷まよひか姿すがたこそ詞ことばこそやさしけれ瓜うり  
 の蔓つるに生ならぬ茄子なすび父ちち親おやと同じ心おなこゝろになつて今いまの我わが身みに愛あい想そが盡つき  
 て、人ひと傳つての文ふみ一通いっつうそれすらもよこさぬとは外面げめん如に菩よ薩ぼさつ、内な  
 心いしんはあれも如に夜や叉しやめ。

## 第四回

他人ひとはとまれお前まへさまばかりは高たかが心こゝろ御ご存ぞんじと思おもふたは空そらだの  
 めか情なさけないお詞ことばお前まへさまと縁えんきれて生ながら存ぞんへる私わたしと思おも召おほしめすか恨うらみ

を申さば其お心が恨みなり父様が悪計それお責め遊ばすに  
 お答への詞もなけれど其くやしきも悲しさもお前さまに劣ること  
 かは人知らぬ夜の家具の襟何故にぬるゝものぞ涙に色のもしあ  
 らば此袖ひとつにお疑ひは晴れやうもの一つ穴の獸とは餘りの  
 仰せつもりても御覽ぜよ繋がれねど身は籠の鳥も同じこと風呂屋  
 に行くも稽古ごとくも一人あるきゆるされねば御目にかゝる折もな  
 く文あげたけれど御住所誰に問ひもならず心にばかり泣て泣て居  
 りましたを薄情もの義理しらずと押くるめてのお詞お道理な  
 れど御無理なり此身一つに科があらば打たれもせん突かれもせん  
 膝ともといふ談合相手に遊ばしてよと涙ながら控へる袂を鋭く  
 拂つてお高どの詞ばかりは嬉しけれど眞實やら何やら心まで見る

目は芳之助あやにく持たず父御の心も大方は知れてあり甲斐  
 性なしの我れ嫌になりて縁の絶ちどが無さに計略三昧かゝり  
 し我等は罨のうちの獸ぞ手を打て笑はるゝ筈を何の涙お化粧がは  
 げては氣の毒なり牛に乗換へるうまき話も内々は有ることなら  
 んを家藏持參の業平男に見せ給ふ顔我等づれに勿體なし  
 お退きなされよ見たくもなしとつれなしや後むき憎らしき事の限  
 り並べられても口惜しきはそれならず解けぬ心にはあらはれぬ胸う  
 らめしく君様こそは何とも思召すまじけれど物ごゝろ知る其  
 のころ頃よりさま／＼のこと苦勞にして身だしなみ物學び彼れか此  
 れかお氣に入りたや飽かれまじと心のたけは君様故に使はれて  
 片時安き思ひもせずお友達遊びも芝居行きもお嫌ひと知れば

おほかたことわ大方は斷りいふて僻物ひがものと笑はれしは誰れの爲ためをさな遊あそびの昔むかし  
 は知らず睦むつまじき中なかにも恥はづかしさが楯たてに成りて思おもふこと思おもふまゝに  
 も得えいはざりしを淺あさき心こころと思おほしめ召たすか假令たとひどのやうな事ことあればと  
 て仇あだし人びとに何なんのその笑わらひ顔がほ見みせてならうことかは山やまほどの恨うらみ  
 も受うくる筋すぢあれば詮せん方かたなし君きみ様に愛想あいさうつきての計略たくみかとはお  
 詞ことばながら餘あまりなり親おやにつながらるゝ子罪こつみは同じおなと覺悟かくごながら其その名なば  
 かりはゆるし給たまへよしや父とと様にどのやうなお憎にくしみあればとて  
 かかはこころわたしきみさまつま君きみ様の妻ななるものを何なにとげくしい他人たにんあし  
 渝こころらぬ心こころの私こころこそ君きみ様の妻ななるものを何なにとげくしい他人たにんあし  
 らひ聞きえぬお心こころやといひたさを押おゆる涙袖なみそでに置おきてモシと止めれ  
 ば振ふり拂はふ羽織はおりのすそエ、何なにさるゝ邪魔じやまくさし我われはお前まへさまの手て  
 遊あそびならずお伽とぎになるは嬉うれしからず其方そなたは大家たいけの娘むすめ御暇ごひまもある

べしその日暮しひぐらの身みは時間じかんもをしく誰れたぞ相手あひてをお探さがしなされと  
 振ふりはらへば又またすがり芳よしさまそれは御眞實ごしんじつかと見上みあぐる面睨おもてらみか  
 へして嘘うそいつはりはお前まへさまなどのなさること義理ぎり人情にんじやうのある  
 世よならよもやと思おもふ生き正直しやうぢきから飼かひ犬いぬ同どう様やうな人ひとでなしに手てを  
 かまれて暖簾のれんに見みる恥はぢは誰れたゆゑぞ原もとを正たゞせば根分ねわけの菊親きくおや子の  
 中なかに知しらぬといふ道理だうりはなしよし知しらぬにせよ知しるにせよそれは  
 其方そなたの御勝手ごかつてなり仇敵かたきの子こを妻つまにもせられず嫁よめにもすまじ言いふこ  
 ともなし聞きくことも無なし恨うらみつらみを並ならべ立てなば力ちから車くるまに牛うし  
 の汗何あせなんの積つみ載のせされるものかは言いはぬが花はなぞお前まへさまは盛さかりの  
 身み春はるめき給たまふは今いまの間まなるべし薦こもかぶりながら見送みおくらんと詞町ことばいね  
 嚙いに氣き込こみあらく齒はの根ねきりくと喰くひしばりて釣つり上あぐる眉根まゆね

おそろしく散髪斜めに拂ひあげて白き面に紅の色さしも優しき  
 常には似ず止めれば振きる袖袂まづ今しばしと詫びつ恨みつ取り  
 つく手先うるさしと立蹴にはたと蹴倒されわつと泣く聲我れとわ  
 が耳に入りて起き返るは何處、平常の部屋に倚りかゝる文机の  
 湖月抄こてふの巻の果敢なく覺めて又思ひそふ一睡の夢夕日  
 かたぶく窓の簾風にあほれる音も淋し。

## 第五回

お珍らしやお高さま今日の御入來は如何いふ風の吹まはしか一  
 昨日のお稽古にも其前もお顔つひにお見せなさらずお師匠さ

まも皆みなさまも大たい抵ていでないお案あんじ日ひがな一いち日にちお噂うはさして居をました  
 と嬉うれしげに出迎でむかふ稽古けいこ朋輩ほうばい錦野にしきのはな子こと呼よばれて醫い學がく士しいの妹もと  
 博愛はくあい仁慈じんじの聞きこえたかき兄あにを見真みまね似おとなか温順おとなしづくり何なに某がし學がく校かう  
 通學つうがく生せい中ちゆうに萬ばん綠りよく叢さう中ちゆう一いつ點てんの紅くれと稱なへられて根ねあがり  
 の高たか鬻まげに被布ひふ扮粧でたちは甘歲はたちを越こしての肩縫かたぬひあげ可か愛はいらしき人ひと品がら  
 なりお高たかさま御覽ごらんなされ老とし人よりなき家いへの埒らちのなあにさ兄あには兄あにとて男をとこの  
 事家内ことうちのことはとんと棄物すてもの私わたし一人ひとりが拍うつも舞まふもほんに埃ほこりだ  
 らけで御座ございますと笑わらひて誘いざなふ座蒲團ざぶとんの上うへおかまひ遊あそばすなと沈しづ  
 み聲こゑにお高たかうやむやの胸むねの關所せきしよたれに打明うちあけん相手あひてもなし朋ともだ  
 友ちの誰たれ彼かれ睦むつまじきもあれどそれは春はる秋あきの花紅はなも葉み對ちつにして  
 挿さす簪かんざしの造つくり物ものならねど當座たうざの交際つきあひ姿すがたこそはやさしげなれ智ち

慧ゑ宏くわうだい 大だいと聞きくは此このひと人ひとすがりて見みばやとこれをさなげも稚ち氣きさりな  
 がら姿すがたに知しれぬは人ひとの心こゝろ笑わらひものにされなばそれはづも恥ちかし何なにとせ  
 んと思おもふほど兄きやうだい弟ていある人ひまらや羨あやまましくなりてお兄あにいさま様さまはおやさ  
 しいとかお前まへさま羨うらやましと口くちを洩もるれば花はな子こ少し笑ゑみを含ふくんでこ  
 ればかりは私わたしの幸あはれさりとて喧けん嘩くわする時ときもあり無む理りな小こ言ごいは  
 れまして腹はら立たち合あふこともあれど跡あとも無なし先さきもなし海なまこ鼠ねずのやうな  
 と笑わらはれます此このごろ頃ころは施せ療れうに暇ひまがなうて芝しば居あも寄よ席せもとんと御ご無ぶ  
 沙さ汰たその内うちにお誘さそひ申まをします兄あにはお前まへさまをといひかかけて笑わらひ消け  
 す詞ことば何なにとしらねどお施ほどこしとはお情なさけ深ふかい事ことさぞかし可か哀あいさうの  
 も御ご座ざいませうと思おもふことあれば察さつしも深ふかし花はな子こ煙たばこ草くさは嫌きらひと聞き  
 しかたは傍はらの煙き管せるとりあげて一いつ服ふくあわたゞしく押おしやりつそれはもう

さま／＼ ツイ二日計前のごく貧の裏屋の者が難産に  
 くるし 苦しみて兄の手術に母子とも安全ではありましたれど赤  
 かご 子に着せる物がないとか聞きませば平常の心に承知がならず其  
 よとほ の夜通して針仕事着るもの二つ遣はしましたと得意顔の物  
 た とく 語り徳は陰なるこそよけれとか聞しが怪しのことよと疑ふ胸に  
 さうだん 相談せばやの心は消えぬ花子さま／＼の患者の話に昨日  
 みまひ 往診し 同朋町とやら若しやと聞けばつゆ違はぬ様子なりそれ  
 ほどまでにはよもやと思へど正しくならば何とせん實否くはしく  
 き 聞きたしと思へど咎むる心に詞つまりて應答何やらうろろにな  
 りぬお高さま御ゆるりなされ今兄も戻りまする先それよりはお目  
 に懸けたきもの往日お話し申せし兄が祕藏の畫帖イエお前さ

まに御覽ごらんに入るゝに賞ほめられこそすれ何なにとして小言こごとき聞くことでは  
 なしお待まち遊あそばせよと待もて遇なぶり詞滑ことばめらかの人ひととて中々なかに歸かへしも  
 せず枝えだに枝えだそふ物ものがたり花子はなこいとゞ眞面目まじめになりて斯かう申まをしては  
 をかしけれどお前まへさまはお一人ひとり子私わたしとても兄あにばかり女をんなの同きやう胞だい  
 もちませねば淋さびしさは同じこと何なにかにつけて心こころ細ほそし御不足ごふそくか  
 は知しらねど妹いもと思おぼしめ召よこしてよと底そこにもある詞ことば遣づかひそれは私わたし  
 より願ねがふことゝいふ詞聞ことばききも畢をはらずそれならばお話はなしありお聽きき下くだ  
 さりますかと怪あやしの根問ねどひお高たかさまお前まへさまのお胸むね一つ伺うかへば譯わけ  
 のすむ事外ことほかでもなし實まことの姉あねさまにおなり下くださらぬかと決きつ然ぱりいは  
 れて御串戲ごじやうだ私わたしこそ實まことの妹いもと思おぼしめ召よこしてと言いふを遮さへりそれでは未ま  
 だ御存ごぞんじの無なきならん父御てふごさまと兄あにとの中なかにお話はなしし成なり立たつてお前まへ

さまさへ御承知ごしやうちならば明日あすにも眞實しんじつの姉様あねさまお厭いやか〜お厭いやな  
 らばお厭いやでよしと薄氣味うすきみわろき優やさしげの聲嘘こゑうそか實まことか餘あまりといへば  
 餘あまりのこと、亂みだるゝ心こゝろを流石さすがに靜しづめて花子はなこさま仰おほせまだ私わたしには吞の  
みこ込めさせぬお答こたへも何も追おつてのこと今日けふは先まづお暇いとまと立たたとす  
 るを強しひめて止とめず然さらばお歸かへりか好よきお返事へんじお待申まちまをしますと送おくり  
 出いだす玄關げんくわん先さき左様さやうならばを跡あとになして乗のり出いだくるまの掛聲かけこゑに走はし  
 り退のく一人ひとりの男をとこあれは何方いづくの藥くすり取とり憐あはれの姿すがたやと見返みかへれば彼方かなた  
 よりも見返みかへる顔才かほ、芳よしさま詞ことばの未いまだ轉まろび出いでぬ間に車まは轆れきろく轆と  
 して轍わだちのあと遠とほく地ちに印しるされぬ。

## 第六回

なかがらす  
 中硝子の障子ごしに中庭の松の姿をかしと見し絹布の四  
 のぶとん  
 布蒲團すつぽりと炬燵の内あたゝかに、美人の酌の舌鼓うつゝ  
 なく、門を走る樽ひろひあれは何處の小僧どん雪中の一景  
 いづつ  
 物おもしろし、とても積らば五尺六尺雨戸明けられぬ程  
 に降らして常闇の長夜の宴、張りて見たしと纏れ舌に譖言  
 の給ふちろく目にも六花の眺望に別は無けれど、身にしむ寒  
 さは降かゝりての後ならで知れぬ事なり、うそ寒しと云ひしも二  
 つみつかあきより  
 日三日朝來もよほす薄墨色の空模様  
 さうる  
 相違なく西北の風ゆふ暮かけて鷺毛か柳絮かはやちららくと  
 ふ  
 降り出でぬ、入相の鐘の聲陰に響きて埒にいそぐ友鳥今宵

の宿りの侘しげなるに誰が空せみの夢の見初め、待合の奥一  
 階の爪弾きの三下り簾を洩るゝ笑ひ聲低く聞えて思はず停る  
 行人の足元、狂ふ煩惱の犬の尻尾、しまつたりと飛び退き  
 て畜生めとはまこと踏みつけの詞なり、我が物なれば重から  
 ぬ傘の白ゆき往來も多くはあらぬ片側町の薄ぐらきに悄  
 然とせし提燈の影かぜに瞬くも心細げなる一輛の  
 車あり、齒代の安さ顯はれて剥げたる塗り破れし母衣、夜目なれ  
 ばこそ未だしもなれ晝はづかしき古毛布に乗客の品も嘸ぞと知  
 られて多くは取れぬ瘦せ田作り米の代ほど有りや無しや九尺一  
 間の煙の綱あはれ手巾にかゝる此人腕力おぼつかなき細  
 作りに車夫めかぬ人柄華奢といふて賞めもせられぬ力役

社しやくわい會かいに生おひ立たつた身みとは請うけと取とれず履りれき歴きは如何いかに聞ききたしと問と  
 人ひとなければ我われと唇くちびる開ひらきもならず、ア、と出でる溜ためいき息きを嚙かみしめ  
 齒はの根ねさぶ寒ふさにふるひて打うちあふ仰おもてぐ面みを見みれば扱さても美び男子なんし色いろこそは  
 黒くろみたれ眉びもく目めやさしく口くちもと元もと柔にゆうわ和わに歳としは漸やうやく二十はたちか一いちか繼つぎ々  
 の筒つゝ袖そで着ぎ物もの糸いと織おりぞろへに改あらためて帯おびに卷まく金きん鎖ぐさりきらびやか  
 の姿なりさせて見みたし流りうかう行かうの花はな形がた俳やくし優やなん何なんとして及およびもないこと  
 大家たいけの若わか旦だんなそれ至したう當やくの役やくなるべし、さりとは是これ程ほどの人じん  
 品んそな備そなへながら身みに覺おぼえた藝げいは無なきか取とり上あげて用もちひる人ひとは無なきか  
 憐あはれのことやとは目めの前まへの感かんじなり心しん情じやうさら〜知しれたもの  
 ならず美うつつくしき花はなに刺とげもあり柔にゆうわ和わの面おもてに案あんぐわい外がいの所しよゐ爲なき  
 もあらし恐おそろしと思おもへばそんなもの、鼻ひいきめ負め目めには雪せつちゆう中ちゆうの梅うめ春はる

待<sup>ま</sup>つまの身<sup>み</sup>過ぎ世<sup>よ</sup>過ぎ小<sup>せう</sup>節<sup>せつ</sup>に關<sup>かゝ</sup>はらぬが大<sup>だい</sup>勇<sup>ゆう</sup>なり辻<sup>つじ</sup>待<sup>まち</sup>の暇<sup>いとま</sup>  
 に原<sup>げん</sup>書<sup>しよ</sup>繙<sup>も</sup>いて居<sup>ゐ</sup>さうなものと色<sup>いろ</sup>眼<sup>め</sup>鏡<sup>がね</sup>かけて見<sup>み</sup>る世<sup>せ</sup>上<sup>じやう</sup>の物<sup>もの</sup>映<sup>うつ</sup>  
 るは自己<sup>おのれ</sup>が眼<sup>め</sup>鏡<sup>がね</sup>がらなり、夜<sup>よ</sup>はまだ更<sup>ふ</sup>けねど降<sup>ふり</sup>しきる雪<sup>ゆき</sup>に人<sup>ひと</sup>足<sup>あし</sup>  
 おほかた絶<sup>たえ</sup>々<sup>々</sup>になりて戸<sup>と</sup>を下<sup>おろ</sup>す商<sup>しやう</sup>家<sup>か</sup>こゝかしこ遠<sup>とほ</sup>く引<sup>ひ</sup>く按<sup>あん</sup>摩<sup>ま</sup>  
 の聲<sup>こゑ</sup>に近<sup>ちか</sup>く交<sup>まじ</sup>る犬<sup>いぬ</sup>の子<sup>こ</sup>の叫<sup>さけ</sup>びそれすらも淋<sup>さび</sup>しきを路<sup>みち</sup>傍<sup>ばた</sup>の柳<sup>やなぎ</sup>にさ  
 つと吹<sup>ふ</sup>く風<sup>かぜ</sup>になよ々と靡<sup>なび</sup>いて散<sup>ち</sup>るは粉<sup>こ</sup>雪<sup>ゆき</sup>、物<sup>もの</sup>思<sup>おも</sup>ひ顔<sup>がほ</sup>の若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>  
 が襟<sup>えり</sup>のあたり冷<sup>ひ</sup>いやりとしてハツと振<sup>ふり</sup>拂<sup>はら</sup>へば半<sup>はん</sup>面<sup>めん</sup>を射<sup>あ</sup>る瓦<sup>が</sup>斯<sup>す</sup>  
 とうひかりあをじろ燈<sup>とう</sup>の光<sup>ひかり</sup>蒼<sup>あざ</sup>白<sup>しろ</sup>し、行<sup>ゆ</sup>く人<sup>ひと</sup>はなし乗<sup>の</sup>る人<sup>ひと</sup>は猶<sup>なほ</sup>更<sup>さら</sup>なからんを何<sup>なに</sup>を待<sup>まち</sup>  
 つとか馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>らしさよと他<sup>よ</sup>目<sup>め</sup>には見<sup>み</sup>ゆるるものからまだ立<sup>たち</sup>去<sup>さ</sup>りもせ  
 ず前<sup>ぜん</sup>後<sup>ご</sup>に目<sup>め</sup>を配<sup>くば</sup>るは人<sup>ひと</sup>待<sup>まち</sup>つ心<sup>こゝろ</sup>の絶<sup>た</sup>えぬなるべし、凍<sup>こほ</sup>る手<sup>て</sup>先<sup>さき</sup>を提<sup>ちやう</sup>  
 燈<sup>ちん</sup>の火<sup>ひ</sup>に暖<sup>あた</sup>めてホツと一<sup>ひと</sup>息<sup>いき</sup>力<sup>ちから</sup>なく四<sup>あ</sup>邊<sup>たり</sup>を見<sup>み</sup>廻<sup>まは</sup>し又一<sup>また</sup>一<sup>ひと</sup>息<sup>いき</sup>此<sup>こゝ</sup>處<sup>ところ</sup>

くるまおろ  
 に車を下してより三度目に聞く時の鐘、今はと決心の臍固まり  
 けんツト立上りしが又懷中に手をさし入れて一思案ア、困  
 つたと我知らず歎息の詞唇をもれて其儘に身はもとの通り舌  
 たうちおとつゝ  
 打の音續けて聞えぬ、雪はいよく降り積るとも歇むべき氣色  
 すこみ  
 少しも見えず往來は到底なきことかと落膽の耳に嬉しや足音  
 かたじけなへり  
 辱しと顧みれば角燈の光り雪に映じ巡回の查公怪しげに目  
 そ、  
 を注いで行き過ぎられし後に又人音この度こそはと見れば情な  
 さんげんばかりてまへ  
 し三軒許手前なる家に入りぬ、流石に氣根も竭果てけん茫  
 ん  
 然として立つくす折しも最少し參ると御座いませうと話し聲し  
 くるかげめうつ  
 て黒き影目に映りぬ、天の與へ人こそ來つれ外すまじと勇み立て  
 す、よ  
 進み寄ればはて何とせん、過たるは及ばざる二人連とは生憎  
 なん  
 なん  
 すぎ  
 およ  
 ふたりづれ  
 あやにく

や、車くるまは一人いちにん乗りなるを。

## 第七回

心こころ苛いらられのさるゝものは散さん曾くわい過すぎて來こぬ迎むかひの車くるまと數かずへ入いれたし、待またせて置おきても宜よかりしを供とも待まちちの雜ざつ沓たふ遠ゑん慮りして時間じかん早はやめに吩いひ附つけて還かへせしもの何なんとしての相さう違みぞやよもや忘わすれこて來こぬにはあらし家うちにても其その通とほり何いつ時ままで迎むかひ出ださずには置おか  
れまじ、例れいの酒しゆ癖へき何どこ處みせの店みせにか醉ゑひ倒たふれて寢ね入りても仕しま舞ひし  
のかまたそれなればどくいよいよ困こまりしことなり家うちにても嘸さぞお案あんじ此こゝ家ゝへ  
も亦また氣きの毒どくなり何なにとせんと思おもふ程ほどより積つもる雪ゆきいとゞ心こゝろ細ほそく燭し

よくるゝ  
 涙 おもてながるゝ表二階に一人取残されし新田のお高、げにも浮  
 きよ おんぎよく世か音曲の師匠の許に然るべき曾の催し斷りいはれぬ筋な  
 らねどつらきものは義理の柵是非と待たれて此日の午後より、  
かざにしきうら飾る錦の裏はと問はゞ涙ばかりぞ薄化粧に深き苦勞の色を隠し  
ともて友が無邪氣の物語りを笑ふて聞く胸ぐるしき思ひに瘦し手  
びと首に取りすがりてお羨ましやお高さまのお手の細さよお酢めし  
あが上りしか御傳授聞きたしと眞面目に問ふ人可笑しくはなくて其  
のこゝろ移りや心根羨ましくなりぬ其の人々 歸り果てゝより一時 間許  
ま待つには長き時間ながら車の音門にも聞えず捨置かれなば未だし  
 もなれどお茶參らせよお菓子あがれ夜はまだそれほど深くもなし  
むかお迎ひも今參らん御ゆるりなされと好遇さるゝ程猶更氣の毒さ  
いままる  
ご  
くわし  
よ  
もてな  
ほどなほさらき  
どく

堪へ難くなりて何時まで待ちても果て見えませねば憚りながら車  
 一つ願ひたしと婢女に周旋のほど頼み入ればそれは何の造作  
 もなきことなれどつひ行き違ひにお迎ひの參るまじとも申されず  
 今少しお待ちなされてはと濫々にいふは車もとめに行くがつら  
 さになるべし、それも道理雪の夜道押ししてと言ひかねて心なら  
 ねど又暫時二度目に入れし茶の香り薄らぐ頃になりても音もな  
 ければ今は來ぬものか當てにもならず當てにして何時  
 といふ際限もなし行き違ひになるともそれはよし兎に角車願ひ  
 たしと押かへして頼み入るゝに師匠實にもと氣の毒がりて然らば  
 お止め申すまじとてもお歸りなさるゝに夜が更けてはよろしから  
 ず車大急ぎに申して來よと主の命令には詮方なくてや恨め

しげながら承はりて梯子あわたゞしく馳せ下りしが水口を出づ  
うけたま だしごがき うへ ゆき  
 大黒傘の上だいくがきに雪つもるといふ間まもなきばかり速すみやかに立歸り  
でいり くるまやど なごり  
 て出入の車宿名残なく出拂ではらひて挽子一人も居ませねばお氣きの  
どく  
 毒どくさまながらと女房にようぼうが口上こうじやうその其まゝの返かへり事に然らば何なにと  
たく あん  
 せんお宅にお案じはあるまじきに明早朝みやうさうてうの御歸館ごきくわんとなされ  
しんせつ と  
 よなど親切しんせつに止められるれど左様さうもならず、雪ゆきこそふれ夜よはま  
ござ  
 だそれほどに御座りませねばと歸り支度かへ じたくとゝのへるにそれならば  
たれ とも つれ  
 誰ぞ供にお連つれなされお歩行御迷惑ひろひごめいわくながら此邊このほとりには車鳥渡くるまちよつと  
おほどほ ちか  
 むづかしからん大通りおほどほ近くまで御難澁ごなんじふなるべし家内うちにてすら  
ひをけすこ はな  
 火桶ひをけすこ少しも放されぬに夜氣やきに當あたつてお風かぜめすな失禮しつれいも何なにもなし  
すく  
 こゝより直すくにお頭巾づきんめ召たせ誰れぞお肩掛かたかけお着きせ申まをせと總掛そうがりに

支度手傳はれて憚りさまといひも敢ず更けぬ内にお急ぎなされな  
 まなかお止め申さずば是れ程に積るまいものお氣の毒のこといた  
 したりお詫はいづれと送り出す門口犬の子の聲恐ろしけれど送  
 りの女中が骨たくましきに心強くて軒下傳ひ三町  
 ばかり御覽なされませあの提灯は屹度車今少しの御辛防  
 と引く手も引かるゝ手も氷りつくやうなり嬉しやと近づいて見れ  
 ばさても破れ車モシと聲はかけしが後退さりする送りの女中  
 ソツとお高の袖引きてもう少し参りませうあまりといへばと跡は  
 小聲なり折しも降しきる雪にお高洋傘を傾けて見返るともなく  
 見返る途端目に映るは何物蓬頭亂面の青年車夫なりお高  
 夜風の身にしみてかぶるゝと震へて立止りつゝ此雪にては

先へ行きても有るか無きか知れませねば何にてもよし此の車お頼  
 みなされてよと俄に足元重げになりぬあの此様な車にお乗しな  
 さるとかあの此様な車にと二度三度お高軽く點頭きて詞なし我れ  
 も雪中の随行難儀の折とて求むるまゝに言附くる那の車さ  
 りとては不似合なり錦の上着につゞれの袴つぎ合したやうなと心  
 をかしく挽出すを見送つて御機嫌よう車夫さんよくお氣をつけ  
 申して。

## 第八回

馳せ出す車一散、さりながら降り積る雪車輪にねばりてか

車しやじやう上じやうの動搖どうえうする割わりに合あせて道みちのはかは行ゆかず萬世橋よろづよばしに來き  
ころし頃ころには鐵道馬車てつだうばしやの喇叭らつぱの聲こゑはやく絶たえて京屋きやうやが時計とけいの十時じふじ  
はうを報はうずる響空ひびきらに高たかし、萬世橋よろづよばしへ參まゐりましたがお宅たくは何方どちらと軾かぢを  
 控ひかへて佇たゞずむ車夫しやふ、車しやじやう上じやうの人は聲こゑひく、鍋町なべちやうまでと只ただ一ひと  
と言い、車夫しやふは聞ききも敢あへず力ちからを籠こめて今いま一いつ勢せいと挽ひき出しぬ、皚がい  
く々くたる雪夜せつやの景けいに異かはりはなけれど大通りおほどほは流石さすがに人足ひとあし足たえ  
ゆきず雪ゆきに照てり合あふ瓦斯燈がすとうの光ひかり皎々かうくとして、肌はだをさす寒氣かんきの堪たへ  
 がたければにや、車しやじやう上じやうの人は肩掛かたかけ深く引ひあげて人目ひとめに見みゆ  
づきんるは頭巾づきんの色いろと肩掛かたかけの派手模様はでもやうのみ、車くるまは如法によほふの破やれ車ぐるまなり  
ほろ母衣ほろは雪ゆきを防ふぐに足たらねば、洋傘かうもりに辛からく前ぜん面めんを掩おほひて行ゆくこ  
いくちやうと幾いくちやう町ちやう、鍋町なべちやうは裏うらの方ほうで御座ございますかと見返みかへれば否いな鍋なべち

やう  
 町ではなし、ほんしろかねちやう  
 本銀町なりといふ、然らばとばかり馳せ出  
 す又一町、曲りませうかと問へば、眞直にと答へて此處に  
 くるま  
 も車を止めんとはせず日本橋迄行きたしといふに何かは知らね  
 ことばとほ  
 ど詞の通り、河岸につきて曲りてくれよ、とは何方右か左か、  
 ひだり  
 左へいや右の方へと又一横町、お氣の毒なれど此處を折れて  
 まつすぐ  
 眞直に行て欲し、と小路に入りぬ、何の事ぞ此路は突當り、  
 ほか  
 外に曲らん路も見えねば、モシお宅はどの邊でと覺束なげに問  
 とき  
 んとする時、何とせん道を間違へたり引返してと復跡戻り、  
 おほぢ  
 大路に出れば小路に入らせ小路を縫ては大路に出で走幾走、轉  
 いくてん  
 幾轉、蹴立る雪に轍のあと長く引てめぐり出れば又以前の道な  
 うすぐら  
 り、薄暗き町の片角に車夫は茫然と車を控へて、仰の通り

に参まゐりましたら又また以前の道みちに出でましたが若もしやお間違まちがひでは御座ござ  
 いますまいか此角これを曲まがると先程さきほどの糸屋いとやの前まへ眞直まつすぐに行ゆけば大おほど  
 通ほりへ出でて仕舞しまひますたしか裏通うらどほりと仰おほせで御座ございましたが  
 町名ちやうめいは何なんと申まをしますか夫次第それしだい大抵たいていは分わかりませうと問掛とひかけ  
 たり、車上しやじやうの人は言葉少ことばくなと角曲かくまがつて見みて下くだされ、たしか  
 此道このみちと思おもふやうなりとて梶棒かぢぼうを向むきかへさせぬ、御覽ごらんなされ  
 まし矢張やはりこゝは元もとの道みちこれで宜よろしう御座ございますかと訝いぶかしてみと  
 ふ車夫しやふの言葉ことばに、ほんにこれは違ちがひたりもう一つ跡あとの横町よちやうが  
 それなりしかも知しれずと曖昧あいまいの答こたへ方かた、さればといふて挽ひき返かへ  
 す一横町ひとよちやうこゝにもあらず今少いまこし先さきへといふ提燈ちやうちん揺ゆり消けし  
 て商家しやうかに火ひを借かりしも二度三度車夫にどさんどしやふまなち亦道くはに委くはしからずやあらん

未だいま此この職しよくに馴なれざるにやあらん同じ道行おな返りて困かうじ果はても  
 したらんつよに強つよくいひても辭じしもせず示しめすが儘まの道みちを取りぬ、夜よは  
 漸やう々くに深ふかくならんとす人影ひとかげちらほらと稀まれになるを雪ゆきはこゝ一  
 段ちだんと勢いきほひをまして降ふりに降ふれど隠かくれぬものは鍋焼なべやき餛飩うどんの細ほそく哀あは  
 れなる聲戸こゑとを下おろす商家しやうかの荒あらく高たかき音おと、さては按摩あんまの笛ふえぬ犬こゑこの聲こゑ小  
 路うぢと一つ隔へだて、遠とほく聞きこゆるが猶なほ更さらに淋さびし、さても怪あやしや車しやじやう上うぢと  
 の人ひと萬よろづ世よばし橋はしにもあらず鍋なべ町ちやうにもあらず本ほん銀しろ町かねちやうも過すぎ  
 たり日本にほん橋はしにも止とどまらず大おほ路ぢこ路ち幾いくとほ通とほりそも何いづ方かたに行ゆかん  
 とするにか洋行やうかうして歸朝きてうののち妻つまを忘わする、人ひとありとか聞ききしが  
 これは又またいかに歸かへるべき家いへを忘わすれたるか歳としもまだ若わかかるを笑止せうしと  
 いはゞ笑止せうし思おもへば扱さても訝いぶかき事ことなり、今こた度は京きやう橋はしへと急いそがせ

ぬ、裏道傳うらみちづたひ二町三町にちやうさんちやう町名ちやうめいは何と知れねど少し引きすこひ入りし二階建にかいだてに掛行燈かけあんどんの光りひか朧々ろうくとして主はありやなしやぬし入口いりぐちに並べし下駄げた二三足料理番にさんぞくれうりばんが欠伸あくび催すべき見世みせがゝりなの割烹店かつぼうてんあり、車しやじやう上ひとの人は目早く認めて、オ、此處こゝなり此處こゝへ一寸と俄ちよつとはかの指圖さしづに一いつせい聲勇いさましく引入れる車門くるまどぐち口おに下ろすかちぼうととも梶棒かぢぼうと共にホツト一息内ひといきうちには女をんな共どもが口々くち／＼に入いらつしやいまし。

## 第九回

勢いきほひよく引入ひきいれしが客きやくを下ろして扱さておもへば恥はづかし、記憶きおくに

のこみせ  
 存る店がまへ今の我が身には往昔ながら世の人は未だ昨日といふ  
 きよねんをと、し どうしやうちゆう  
 去年一昨年、同商中の組合會議或は何某の懇親  
 くわい のぼ  
 曾に登りなれし梯子なり、それと知れば俄に肩すぼめられて見  
 ひと  
 る人なければ遽しく片蔭のある薄暗がりにも車も我も寄せて憩ひ  
 つ、靜かに顧みれば是れも笹原走るたぐひ、誰が目に覺えて知  
 るものぞ松澤の若大將と稱へられて席を上座に設けられ  
 し身が我れすらみすばらしき此服装よしや面に覺えが有ればとて  
 たにん そらに  
 他人の空肖、それもあるならひなり況してや替りたる雪と墨おろ  
 かなこと雲と泥ほど懸隔のおびたゞしさ如何に有爲轉變の世と  
 はいへ是れほどの相違誰れが何として氣のつくべき心の鬼に見知  
 り越しの人目厭はしく態と横町に道を避けて見られじとする

氣あつかひも他人は何の感じもなく摺れ違つて見合はず眼の電  
 光、ハツと思ふは我ればかり、態とつくるかまこと見忘れてか  
 知らず顔に過ぎ行かれて、撫で下ろす胸にむらくと感ずるはさ  
 ても人情こそ薄きものなれ紙といはゞ吉の紙見えすいたやう  
 な世の中なり、知り顔して欲しきにもあらず詞かけられては身の  
 置場もなければそれにも何か色のあるもの、物いはゞ振切らんず  
 袖がまへ嘲るやうな尻目遣ひ口惜しと見るも心の僻みか召使  
 ひの者出入のもの指折れば少からぬ人数ながら誰れ一人として我  
 れ相談の相手にと名告出づるものなし、富貴には寄る親類顔  
 幾代先きの誰様に何の縁故ありとかなしとか猫の子の貰ひ主  
 まだが實家あしらひのえせ追従、槌で掃く庭石の周旋を手

はじめに引き入れる工夫算段はじいて見ねば知れぬものゝ割り  
 にも合はぬ品いくら冠せて上穂は自己が内懐中ぬくゝとせし  
 絹布ぞろひは誰れ故に着し物とも思はずお庇護に建ちましたと空  
 をが拜みせし新築の二階造り其の詞は三年先の阿房鳥か、今  
 の零落を高見に見下して全體意氣地が無さすぎると言ひしと  
 か酷と思ふは心がらなり、他人が聞けば適當の評といはれやせ  
 ん別家も同じき新田にまで計らるゝ程の油斷のありしは家の運の  
 傾く時かさるにても憎きは新田の娘なり、うつくしき顔に似合ぬ  
 は心小學校通ひに紫袷紗對にせし頃年上の生徒に喧嘩  
 嘩まけて無念の拳を我れ握る時同じやうに涙を目に持ちて、口  
 惜しげに相手を睨みしこともありしがそれは無心の昔なり我れ性

來いらいの虚きよ弱じやくとて假初かりそめの風邪ふうじやにも十日廿日新田とをかの訪問はうもん懈た  
 れば彼處かしこにも亦また一人ひとりの病びやう人にん心配しんぱいに食しよく事じも進すすまず稽古けいこごと  
 に行ゆきもせぬとか、お前まへさまお一人ひとりのお煩わづらひはお兩人ふたりのお惱なやみと  
 婢女めいなん共どもに笑わらはれて嬉うれしと聞ききしが今いま更さらおもへば故ことらに言いはせ  
 しか知しれたものならず此この頃ごろ見みしは錦野にしきのの玄げん關くわん先さきうつくし  
 く粧よそほふた身みに比くらべて見みて我われより詞ことばは掛かけられねど無言むごんに行過ゆきすぎ  
 るとは不埒ふらちならずや身みこそ零落おちぶれたれ許いひなづけ嫁えんの縁えんきれしならずま  
 こと其その心こころなら美うつくしく立派りつぱに切きれてやりたし切きれるといへば  
 貧乏びんぼう世帯よたいのカンテラあぶらの油こよひ、今宵もちの用もちひだけありしか如何いかに、  
 さらでも御不自由ごふじゆうのお兩親ふたりが燈火ともしびなくば嘸さぞお困こまり早く歸かへりて様や  
 子うすし知りたきもの、今いまの客きやく人じんの氣きの長ながさまだ車代しやだいくれんとも

せず何時まで待たする心にやさりとてまさかに促りもされまじ何  
 としたものでとさし覗く奥の方廊下を歩む足音にも面赫と熱く  
 なりて我知らず又蔭に入る、思へば待たる、やうな待たれぬやう  
 な萬一車代を渡す人知りし顔の女中ならば何とせん詞が  
 けられなば何といはん恥の上塗りは要なきことなり車代といふ  
 も知れたもの受けずともよし此まゝに歸らんか否是れ欲しければ  
 こそ雪の夜を一時三時恥も外聞も親には換へられたものな  
 らず、はて誰れでも出て來よ此姿に何として見覚えがあるも  
 のかと自問自答折しも樓婢のかなきり聲に、池の端から來た車  
 夫さんはお前さんですか。

## 第十回

それは何ぞのお間違ひなるべし私お客様にお懇親はなし  
 池の端よりお供せしに相違は無けれど車代賜るより外に御用あ  
 りとは覺えず其譯仰せられて車代の頂戴お願ひ下された  
 しと一步も動かんとせぬ芳之助を誘ふ樓婢は笑みを含み、お間  
 違ひやら何やら私等の知る事ならねど只お客様さまの仰せには今  
 の車夫に用事がある足を洗はせて此室へ呼びたしと仰せられたに  
 相違はなし兎に角お上りなされよと洗足の湯まで汲んでくるゝは  
 よも串戲にはあらざるべし偽りならずとせば眞以て奇怪、  
 何人が何用ありて逢ひたしといふにや親戚朋友の間柄

にてさへ面背ける我に對して一面の識なく一語の交はりなき然  
 かも婦人が所用とは何事逢たしとは何故人違ひと思へば  
 譯もなければ彼處といひ此處といひ乗り廻りし方角の不審しさ  
 それすら事の不思議なるに頼みたきことあり足を洗ひて上りくれ  
 よとは扱も意外わからぬといへば是れ程わからぬ話はなし何と  
 せば宜からんかと佇立たるまゝ躊躇へば樓婢はもどかしげに急  
 がしたてゝ、お客さまも嘸お待ちかねお逢にならば譯はどの道知  
 れる筈なり先づお出なされよと手をとらへて引立つるに然らば參  
 るべしお手お放しなされ大方は人違ひと思へどお目にかゝり  
 し上ならではお疑ひ晴れ難からん御案内お頼み申すと明瞭に  
 答へながら心の裡は依然濛々漠々々々、靜かに足を淨め了り

ていぎとばかりに誘はれぬ、流石なり商賣がら燦として家内  
 を照らす電燈の光りに檻樓の針の目いちじるく見えて時は今極  
 寒の夜ともいはず背に汗の流るぞ苦しき、お客さまはお二階な  
 りといふ伴はるゝ梯子の一段又一段浮世の憂きといふ事知ら  
 で昇り降りせしこともありし其時の酌取り女我が前離れず喋  
 々しく歎待したるが彼の女もし居らば彌々面目なき限りな  
 り其頃の朋友今も遊びに來んは定の物何ぞのはしに我がこと引  
 き出して斯々云々とも物語りなば何處まで知らるゝ恥  
 ならんと思へば何故に登樓たるか今更に詮なき事してけりと  
 思ふほど胸さわがれて足ふるひぬ、案内はかねて知る梯子を登  
 り果てゝ右手の小座敷、お客さまは此處にと示したるまゝ樓婢は

いそお 急ぎ下り行きたり障子の外に暫時たゆたひしが果つべきことな  
 らずと身を低くして靜かに明くる座敷の内これは如何に頭巾に見  
 えざりし面肩掛につゝみし身今ぞ明らかに現はれぬ、寤寐にも  
 はな 離れず起居にも忘れぬ我が後來の半身二世の妻新田が娘のお  
 たか 高なり、芳之助はそれと見るより何思ひけん前後無差別、  
 きびすかへ 踵を回してツト馳出づればお高走り寄つて無言に引止むる帶の端  
 ふりはら 振拂へば取すがり突き放せば纏ひつき芳さまお腹だちは御尤  
 もなれども暫時、お長うとは申しませぬ申しあげたきこと一通り  
 ことば と詞きれ／＼に涙漲りて引止むる腕ほそけれど懸命の心は蜘蛛  
 も 蜘蛛の圍の千筋百筋力なき力拂ひかねて五尺の身なよくとな  
 れど態と荒々しく突き退けてお人違ひならん其様な仰せ承

はる私にはあらず池の端よりお供せし車夫の耳には何のことやら  
 理由すこしも分りませぬ車代賜はる外御用はなき筈御串戯は  
 お措き下されと言ひ拂つてすつくと立てば、あんまりなり芳さま  
 そのころ  
 其お心ならそれでよし私にも覺悟ありと涙を拂つてきつとなるお  
 たか 高、オ、おもしろし覺悟とは何の覺悟許嫁の約束解いて欲  
 し、とのお望みかそれは此方よりも願ふ事なり何の迂りくだい申  
 をしあ 上ぐるこの候の一通りも二通りも入ることならず後とはい  
 はず目の前にて切れて遣るべし切れて遣らん他人になるは造作も  
 なしと嘲笑ふ胸の内に沸くは何物、お高涙の顔恨めしげに、  
 なさけ お情なしまだ其様なこと自由にならば此胸の中斷ち割つて御覽  
 に入れたし。



は心つゝむ色目に何ごといろめ なにも顯はれねど出嫌ひと聞えしお高昨日は  
 池の端の師匠のもとへ今日は駿河臺の錦野へと駒下駄直さ  
 する日の多かるを不審といはゞ不審もたつべきながら子故にくら  
 きは親の眼鏡運平が邪智ふかき心にも娘は何時も無邪氣の子供  
 の伸びしは脊丈ばかりと思ふか若しやの掛念せたけ おも少しもなくハテ中けねんすこの好  
 かりしは昔のことなり今の芳之助むかし いま よしのすけに何として愛想の盡ぬものが  
 あらうか娘はまして孝心むすめ かうしんふかし親の命おや いひつけ令ること背く筈なし心  
 配無用と勘藏が注意をさへ取りあげもせず錦野が懇望  
 恰もよし彼れは有徳の醫師なりといふ故郷某の地には少からぬ  
 地所をさへ持てりと聞くに娘の爲にも我が爲にも行末ちしよ むすめ ため わ ためわろき縁  
 組ならずとよりくんぐみ さうだんの相談も洩れきく身の腹だゝしみ はらき縦令身たとひみ

ぶんむかしとほ  
 分は昔の通りならずとも現げんざい在あゆるせし良人をつとある身みに忌いまはしき嫁よ  
 めいりぎた  
 入沙汰いきくも厭いやなり表おもてにかざる仁者じんしやがほ顔かほは畢ひつきやう竟なにごと何事なにごとかの  
 しゆだん  
 手て段だんかも知しれたことならず優やさしげな妹いもとご御おも當あてにならぬよし  
 をりくみ  
 折をり々くみ見たみこともあり毒どくじや蛇じやのやうな人ひと々／＼信用しんようなさるお心こころ  
 なに  
 には何なにごと申まをすとも甲斐かひはあるまじさりとて此このまゝ儘まゝに日ひを送おくらば  
 かな  
 悲かなしきことこの來こんは目めの前まへなり聞きかせて心しんぱい配ぱいさするも憂うければ  
 たの  
 頼たのむは彼かの人の力ひとちからのみ男をとこの智慧ちゑには良よき考かんがへもなからずやと思おもひ  
 たてばこころ心こころは矢や竹たけ、はやるほど猶なほ落おち附つきてお友とも達たちの誰たれさま御ご病びやう  
 き  
 氣きときく格かく別べつに中なかの好よき人ひとではあり是非ぜひお見み舞ま申まをしたく存ぞんじ  
 ゆるし  
 ますがと許ゆる容りを請こへば平つ常ねの氣きだてに有あるべき願ねがひとて疑うたがひもな  
 うんべい  
 く運うん平べい點うなづ頭づきて然さらば疾とく行ゆきて疾とくかへれ病びやう人ひとの處ところに長な

居がはせぬものとも供なべには鍋なべなりと連つれて行ゆきなされと氣きをつくればイ  
 エそれには及およびませぬ裏うら通どほりを行ゆけばつい其處そこなり鍋なべも家うちのこ  
 とが忙いそが御座ございますツイ行ゆてツイ歸かへるに供ともなどゝは大層たいそうすぎ  
 ます支度したくも何なにも入いりませぬ、此このま儘ますぐにとそこゝ身仕度みじたくして  
 庭にはぐち口出いでんとする途端とたぬ嬢やうさま今日けふもお出でかけか何處どこへぞと勘かん  
 藏うがぎろゝ目恐めおそろしけれど臆おくしてなるまじと態わざとつくる笑顏ゑがほ  
 愛あいらしく今日けふもとは勘藏かんざう酷ひどいぞや今日けふはと言いはねばてにをはが  
 違ちがふ所ところぞとほゝ笑ゑみて何氣なにげもなしに家いへを出いでぬ約やく束そくの辻往つじゆきつ返かへ  
 りつ待まてどもまてども今日けふはいかにしけん影かげも見みえず誰たれに聞きか  
 んもうしろめたし何なにとせん必かならず訪たまたま給たまふな我家わが知いられんは恥はづかし  
 とて丁ちやうど所ところつげ給たまはねど曩さきに錦野にしきのにてそれとなく聞ききしはう

おぼろ 覺えながら 覺えあり 縦し お怒りに くれゝば それまで、 空しく 物  
 を おもふ よりは 寧お目にかゝりし うへにて 兎も 角も せんと 心に 答  
 へて 妻戀 下とばかり 當所なしに こゝの 裏屋かし この 裏屋さりと  
 ては 雲 掴む やうな 尋ねもの も 思ふ 心が する べに や 松 澤といふ か  
 なに 何か 知らねど 老人の 病 人 二人ありて 年 若き 車夫の家なら  
 ば 此裏の 突當りから 三軒目 溝板の 外れし 所が それなりと  
 まで 教へられぬ 時は 夕暮の 薄くらきに 迷ふ 心も かき 暮されて 何  
 と 言入れん 戸の すき間より さし 覗く 家内の いたましさよ 頭巾 肩  
 掛に 身は つゝめど 目を もる ものは 紅の 涙。

## 第十二回

さらでも老ては僻むものとか況んや貧にやつれ苦にやつれ人恨  
 めしく世の中つらく明けては歎き暮れては怒り心晴間なければさ  
 までは無き病氣ながら何時癒るべき景色もなくあはれ枯木に  
 似たる儀右衛門夫婦待ちわびしきは春ならで芳之助の歸宅の遅  
 さよ好き客ありて遠くまで行きたるにやそれにしても最う歸りさ  
 うなもの日没まへに一度づゝ様子見に戻るが常なるを何として今  
 日はと頸を延ばす心は同じ表のお高も路次口顧みつ家内を覗きつ  
 芳さまはどうでもお留守らしく御相談すること山ほどあるをお  
 目に懸らでは戻らることかはさるにても此病人のうへに此  
 お生計右も左もお身一つに降りかゝる芳さまが御心配は噯なる

べし尋常ならば御兩親の見取り看護もすべき身が餘所に見聞  
 く苦しきよと沸き返る涙胸に呑みて差のぞかんとする二枚戸を内  
 より明けて面を出すは見違へねども昔は残らぬ芳之助の母が姿  
 なり待つ人ならで待たぬ人の思ひも寄らず佇むかげに驚かされて  
 物のいはず見つむる目元も疎くなりてや不審げに誰何さまぞと問  
 はるゝもつらしお高頭巾を手早く取りてお忘れ遊ばしたかと取す  
 がりて啼く音に知るゝ焼野の雉子我子ならねど繋がる縁とて母は  
 をんをゝろよわ女の心も弱く才ゝお高か否お高どののか何として此様な處へ何う尋  
 ねて知れましたとおろゝ涙の聲きゝ附けてや膝行出づる儀右衛  
 門はくぼみし眼にキツと睨みてコレ何を云つて居るぞ夕方は別  
 して風が寒し其うへに風でも引かば芳之助に對しても濟むまい

ぞやといふ詞の尾に附いてお高おそるゝ顔をあげ御病氣とい  
 ふことを人傳ひとづてに聞きましてお怒りにふれるとは知るも御様子ごやうすが  
 伺うかがひたさに出でにくい所を繕ところつくろつて漸やうやうの思おもひで参まゐりましたお父様とつさまに  
 もお執成とりなしをとしほくとして言いひ出いづるを取次とりつぐ母が詞はも待またず  
 儀ぎゑ右衛門もん冷笑あざわらつて聞きかんともせずさりとは口くちがしこ賢賢くさま／＼  
 の事ことがいへたものかな父親てゝおやに薰陶しんまれては其その筈はずの事ことながらも  
 う其手そのてに乗りはせぬぞよ餘計よけいな口くちに風引かぜひかさんより早く歸宅きたくくさ  
 るゝが宜よさゝうなもの誠まことと思おもひて聞きくものは此家このやの内うちに一人ひとりもな  
 し老婆ばあさまも眉毛まゆげよまれるなど憎にく々々しく言いひ放はなつて見返みかへりもせ  
 ずそれは御尤ごもつともの御立腹ごりつぶくながら是これまでのこと露つゆばかりも私わたくし知しり  
 ての事ことはなしお憎にくしみはさることなれど申まをしわけ譯ひととほの一通りお聞きき

遊あそばして昔むかしの通とほりに思おほしめ召しめしてよと詫わびい入ことばきる詞ことば聞ききも敢あへず何なんとい  
 ふぞ父てゝおや親つみの罪つみは我われは知しらぬ今いままで通とほり嫁よめしうと  
 か聞きいて呆あきれるなり考かんがへて見みよ人にん非び人にんの運うん平べいの娘むすめを妻つまに持もつ芳よし  
 之助しのすけと思おもふかよしや芳よし之助しのすけが持もつといふとも我われある以いじやう上う  
 は嫁よめにすること毛もう頭とうならぬ汚けがらはしゝ運うん平べいの名な思おもひ出だしても  
 胸むねが沸わくなり況ましてやそれむすめが娘よめを嫁よめになんと思おもひも寄よらぬことなり  
 詞ことばかはすも忌いまはしきに疾とく々く歸かへらずやお歸かへりなされエ、何なにをうち  
 く老ぼ婆あさま其そこ處こを閉しめなさいと詞ことばづかひも荒あらく々くしく怒いかりの面め  
 色いろすさまじきを母はは見みかねてそれはあまりに短たん氣きなりあの子こ  
 の詞ことばも一通ひとりは聞きいてお遣やりなされませぬかと執とり成なすをハタと睨にらん  
 で汝そちまでが同おなじやうに何なんの囁たはご語ご最早はや何なに事こと聞きく耳みみもなし汝そちが追お

ひ出さずば我れ自身にと止むる妻を突のけつゝ病勞れても老の  
 一徹上りがまちに泣顔れしお高が細腕むづと取りつ力を極  
 めて押出す門口お慈悲に一言お聞き入れをと詫るも泣くも何  
 の用捨あらくれし詞に怒りを籠めて嫁でなし舅でなし阿伽の他  
 人の來る家でなし何といふとももう逢はぬぞ、ハタとたて切る雨  
 戸の闕くちは溝か立端もなくわつと泣く空に闇を縫ひ行く鳥の  
 兩三聲。

## 第十三回

覺悟の身に今更の涙見苦しと勵ますは詞ばかり我れまづ拂

まぶたつゆ 露の消えんとする命か扱もはかなし此處松澤新田が先  
 ふ瞼まぶたの露つゆの消えんとする命いのちか扱さもはかなし此處こゝ松澤まつざは新田にが先つた  
るみだい 祖累代の墓所晝猶暗き樹木の茂みを吹拂ふ夜風いとゞ悲惨  
 祖累代ぼしよひるなほくらの墓所ぼ晝猶暗じゆもくき樹木しげの茂ふみを吹ふ拂はら  
こゑ の聲こゑをそへて梟ふくろの叫こゝろび一段いちだんと物ものすごしお高決たか心の眼まなざし光あたじ  
こゝおく ろがこゝお心こゝ怯おれかさりとては御未練ごみれんなり高たかが心こゝろは先まへほども申まをす通とほ  
きは り決きめし覺悟かくごの道みちは一つ二人ふたりの身みを犠牲ぎせいにしてもお前まへさまのお心こゝろ  
うかざさき 伺うかふ先に生いきて還かへる念ねんはなし父御ていごさまの今日けふの仰おほせ人非にんび人の運う  
んべい 平んべいが娘むすめを嫁よめになどゝは思おもひも寄よらぬことなり芳之助よしのみけは兎ともあ  
わ れ我われ許ゆるさずと御立腹ごりつぷくの數かず々くそれいさゝかも御無理ごむりならねど  
まへ お前まへさまと縁えんきれて此世何このよなんの樂たのしからずつらき錦野にしきのがこともあ  
しよせん り所詮しよせんは此命このいのち一つぞと覺悟かくごの道みちも同じおなじやうに行逢ゆきあつてお前まへ  
こゝろかゞ さまのお心こゝろ伺かへば其通そのとほりとか今更いまさら御違背ごゐはいのある筈はずなし私わたしは嬉うれ

しう存ぞんじますをと美事みごとに言放いはなつて嘯かむ襦じゆばん袷そでの袖み、未練みれんなどが  
 あることかは我われ男をとこの一疋いつびきながら虚きよじやく弱みの身ちかおよの力ふじふぶん及たゞばず只たゞに  
 もあらで病やまひに臥ふす兩親ふたおやにさへ孝養かうやう、抱持はうぢの不ふじふぶん十分かひさ甲斐かひ  
 なき身恨みうらめしくなりて捨すてたしと思おもひしは昨日きのふ今日けふならず我われ々々  
ふたりか二人ふたり斯かくと聞きかば流石さすが運平うんぺいが邪慳じやくけんの角つのも折をれる心こゝろになるは定ぢやう  
 なり我わが親おやとても其その通とほり一徹いつてつの心和こゝろはらぎ寄よらば兩家りやうけの幸かうふ  
 福くこの上うへやある我われ々々二人世ふたりよにありては如何いかに千辛せんしん萬苦ばんくする  
 とも運平うんぺいに後こうくわい悔ねんの念ねんも出でまじく況ましてや手てを下さげての詫わがご  
なんと何なんとしてするべきならずよしや膝ひざを屈まげればとて我親決わがおやけつして  
きゝい肯きれはなすまじく乞食こつじき非人ひにんと落魄おちぶるとも新田にった如ごときに此この口腐くちくさ  
 れても助けたすを求もとむることはせずとそれ平生へいせいの詞ことばなるもの盡じん未み來らい

この不和ふわなかの中解なかつける筈はずなし數代すだい續つゞきし兩家りやうけのよしみ一朝いつてうにし  
 て絶たやさんこと先祖せんぞの遺旨ゐしにも違たがふことなり世よの人は愚ぐとも笑わらは  
 ん痴ちとも見みん、さりながら先祖せんぞに對たいし家いえに對たいする孝かうは二人ふたりが命いのちな  
 り捨すて、榮はえある身みぞと思おもへば何處いづくに殘のこる未練みれんもなしいざ身支度みじたくを  
 と最期さいごの用意よういあはれ短みじき契ちぎりなるかな井筒ゐづゝにかけし丈たけくらべ振ふりわ  
 け髪がみのかみならねば斯かくとも如何いかゞしら紙かみにあね様さまこさへて遊あそびし  
 頃ころこれは君きみさまこれは我われ今日は芝居しばゐへ行くのなり否花見いやはなみの方が我わ  
 れは宜よしと戯たはむれ交かはせしそれひとも願ねがひの叶かなひしことはなく待まちに  
 まちし長ちやうじつげつ日月にちげつのめぐり來きて見みれば果敢はかなしや世よは桑田さうでんの海うみ  
 ともならねど變かはるは現げんざい在親おやこゝろの心こゝろ、ましてや他人たにんの底そこふかき計けいり  
 略やくの淵知ふちしるべきならねば陥おとしれられて後のちの一悔ひとくわい恨こんむな空くうしく吞のむ

なみだは 涙の 晴れ間は 無くて 降りかゝる 憂苦と 繋がる、 情緒に 思慮分  
 んべつ ぬばたまの 闇くらき 中にも 星明りに 目と目 見合せて 莞爾と  
 別も 烏羽玉の 顔うら淋しく いざと 促せば いざと 答へて 流石に た  
 ばかり 名残の 笑顔 うちよも 幾分 時思ひ 定めて ツト立より つ用意の 短刀 とり直  
 ゆたはるゝ 幾分 時思ひ 定めて ツト立より つ用意の 短刀 とり直  
 せば 後の 藪に 何やら 物音 人も や來つると 耳を 澄ますに 吹き渡る  
 かげだ 風定かに 聞えぬ 扱追手にも あらざり けり お高 支度は 調ひしか 取  
 だ 亂さんは 亡き 後までの 恥なる べし 心 靜かに と 誠める 身も 詞  
 ふる ひぬ 惨ましゝ 可惜 青年の 身花 といはゞ 荅の 枝に 今や 吹き起  
 らん 夜半の 狂風、 お高が 胸先 かくつろげんと する 此時は や  
 し 間一髪、 まち給へと ばかり 後の 藪垣 まるび 出で、 利腕し  
 つか と 取る 男 誰れぞ 放して 死なして と 脆弱き 身にも 一心に 振切

らんとするをいつかな放さず、いや放しませぬ放されませぬお前  
 さま殺しては旦那さまへ濟みませぬといふは正しく勘藏か、と  
 お高の詞の畢らぬ内閣にきらめく白刃の電光アツと一聲一刹  
 那はかなく枯れぬ連理の片枝は。

## 第十四回

こぼれ松葉の土になるまで二人ともにと契りしものを我ばかり  
 何として後るべきと足ずりして歎きしが命果敢なく止められて再  
 び見んとも思はざりし六疊敷の我が部屋をその儘の座敷牢縁  
 の障子の開閉にも乳母が見張りの目は離れず況してや勘藏

が注意ちゆうい周到しうたう翼ばさあらば知らぬこと飛ぶ鳥ととりならぬ身に何方いづくぬけ出  
 でん隙すきもなしあはれ刃物はもの一つ手てに入れたや處ところは異れど同じ道おなみちに後  
 れはせじの娘むすめの目色めいろ見てとる運平うんぺいが氣遣きづかはしき錦野にしきのとの縁えんだ  
 談んも今いまが今いまと運びはこし中なかに此このこと知られなば皆畫餅みなぐわべいなるべし包つ  
 まるゝだけはと祕ひしかくして宥なだめてみつ賺すかしてみつ意見いけんに手てをか  
 へ品しなをかふれど袖そでの涙晴なみなほれんともせず兔ともすれば我われも俱ともにと決死けつし  
 の素振そぶりに油斷ゆだんならず何なにはしかれ命いのちありての物ものだねなり娘むすめの心落附こころおちつ  
 かすに若しくはなしと押おしては婚儀こんぎをすゝめもなさず去さるものは日ひ  
 々々に疎うとしの俚諺ことわざもあり日ひをだに經ふれば芳之助よしのすけを追慕つゐほの念ねんも薄うす  
 らぐは必ひつちやう定ちやうなるべし心こころながく時ときを待つ春はるの氷こほりに朝日あさひかげおの  
 づから解とけわたる折をりならでは何事なにごとの甲斐かひありとも覺おぼえず誰たれも

く異見いけんは言いふな心こころの浮うく話はなしに氣きをなぐさめて面おもしろ白よき世よをおも  
 しろしと思おもはするの肝かんえう要えうぞと我先われ立ちて機嫌きげんを取りつ慰なぐさめつ  
 一方かたへは心こころを浮うかせんと力つとめ一方かたへは見張みはりを嚴げんにして細ほそひも一筋ひとすぢ  
 小刀こがたな一いつてふ挺たかお高めが眼めに觸ふれさせるな夜よるは別べつして氣きをつけよと氣き  
 配くばり眼めくば配おほかたり大方めしつかならねば召めしつか使えひの者ものも心こころを得えて風かせの音おとをも只ただ  
 には聞きかず鼠ねづみの荒あれにも耳みみそばだてつ疑ぎしん心あんきは暗しやう鬼おくを生まずる奥おくの間ま  
 に其人そのひと現げん在ざい坐ざすを見みながら嬢ぢやうさまは何處いづこへぞお姿すがたが見みえぬや  
 うなりと人ひと騷さわがせするもあり乳母うばは夜よの目めろくく合あさずお高たか  
 が傍かたへに寢床ねどこを並ならべ浮世うきよ雜談ざだんに諷諫ふうかんの意いをこめつ可笑をかしく面おもし  
 白しろく物ものがたりながら沈しづみがちな主しゆの心こころ根ねいぢらしくも氣遣きづか  
 はしく離はなれぬ守まもりにこれも一ひとつの關せき所しよなり如何いかにしてか越こえら

るべき如何いかににしてか遁のがるべきお高髪たかみとりあげず化粧けしやうもせず粧よそほひし  
 昔むかしの紅白粉べにおしろいは誰たれが爲ための色いろならず君きみにおくれて鏡かゞみの影かげに合あはす面  
 つれなしとて伽羅きやらの油あぶらの香かりも留とめず亂みだれ次第しだいの花はなの姿すがたやつれる  
 身みを我われと頼母たのもしく、ならば此このま儘まに死しにたしと願ねがへど命いのちは心こころのまゝ  
 ならず病やむともなく煩わづらふともなくつく／＼と眺ながめてつくづくと  
 泣なく涙なみだと空そらとを意いちゆう中ちゆうの友ともとして送おくらねど迎むかへねど來くるものは月つき  
 改あらたまるは歳としちりて返かへらぬ君きみを思おもへば何なんぞ櫻さくらの春はるしり顔がほに今ことし歳さいも咲  
 ける面つらにくさよ又またしても聞きく堀切ほりきりの菖蒲しやうぶだより車くるまをつらねて  
 見みに行ゆきしはそもいつの世よの夢ゆめになりて精しやうりやう靈だ 棚なの眞まこもの  
 上うへにも表おもてだちては祀まつられずさりとは世よの中なかうらめし、照てる月つきの  
 秋あきの夜草葉よくさばに脆もろき白しら玉たまの露つゆと答こたへて消きえかぬる身みを何なんと御覽ごらんじ

て何とお恨みなさるべきにや過ぎし雪の夜の邂逅に二つなき貞  
 心嬉しきぞとてホロリとし給ひし涙の顔今も眼の前に存るやう  
 なりさりながら思ふ心は幽冥の境にまでは通ずまじきにや無情  
 く悲しく引止められし命を未練に惜みてとも思召さん苦しきよ  
 と思ひやりては伏し沈み思ひ出してはむせ返り笑みとは何ぞ夢に  
 も忘れて知るものは人生の憂きといふ憂きの數々來るものは  
 無意無心の春夏秋冬落花流水水ちりて流れて寄せ返る波の  
 年又年今日は心の解けやする明日は思ひの離れやするあはれ榮  
 花の身にしたりし娘にも綺羅かざらせて我れも安心の樂隱居  
 願はくは家運長久なれ子孫繁昌なれ兎角は身の上に凶  
 事あらせじとの親心に引かへし願ひも逆さまながら今日身

をすてんか明日こそはと窺ふ心に怠りなけれど人目の關守何と  
 して隙あるべき此處に七年身はまだ籠中の鳥。

## 第十五回

お父様にも勘藏にも乳母には別しての事いろくくと苦勞をか  
 けまして今更おもへば恥かしいやらお氣の毒やら幼心のあ  
 と先見ずに程のない無分別さりながら盡きぬ命かや事も無く助  
 かりしを嬉しいとは思ひもせでよしなき義理だてに心ぐるしく芳  
 さまのお跡追ふてと思ひしは幾たびかさりとては命二つあるかの  
 やうに輕々しい思案なりしと後悔して見れば今までの事

口惜しくこれからの身が大切になりました阿房らしい死んだ人  
 への操だて何に成ことでもなきを何時まで獨身で居る心が數へる  
 歳の心 細さはほどならばなせ昔お詞そむいて厭ひしか我れと  
 我が身知れませぬ母さまなしのお手一つに御苦勞たんと懸けまし  
 て上の上にも又幾年お心休めぬ不料簡不孝のお詫は 向 後  
 さつぱり芳さまのこと思ひ切つて何方への縁組なれ仰せに違  
 背はいたしませぬ勘藏も乳母も長の間的心づかひ嘸かすと氣の  
 毒な私の心は今もいふ通り晴てみれば迷ひは雲霧これまでの氣  
 は少しもなし必ず必ず心配して下さるなよと流石に心の弱れば  
 にや 後 悔の涙を目にたゝへてお高斯くとは言出しぬ 歳 月 心  
 を配りし甲斐に漸く此 詞にまづ 安心とは思ふものゝ運平

なほも油斷ゆだんをなさず起居たちゐにつけて目をそゞぐにお高たかは詞ことばに違たがひも  
 なく愁うれひの眉まゆいつしかとけて昨日きのふにかはるまめくしき父ちちのもの我わ  
 がもの云いへば更さらに手代小僧てだいこぞうの衣類いるゐの世話せわぬ縫ぬひほどきにまで氣きを用もち  
 ひて浮うき々とせし様子やうすに扱さては眞まことに悔悟くわいごして其その心こゝろにもなりぬ  
 るかと落附おちつくは運平うんぺいのみならず内外うちとのものも同じこと少し枕まくらを  
 安やすんじけりさるにても訝いぶかしきは松澤夫婦まつざはふうふが上うへにこそ芳之助よしのみすけ在ざ  
 世いせの時ときだに引窓ひきまどの烟けぶりたえ／＼なりしを今いまはたいかに其日そのひを送おく  
 るや可惜あたらわかき若木はなの花はなにおくれて死ぬしべき病やまひは癒いたるもの、僅わづか手てない  
 内職しよくの五錢ごせん六錢ろくせん露命ろめいをつなぐ術すべはあらじを怪あやしのことよと尋たづ  
 ねるに澆季げうきの世よとは聞きくもの、猶陰徳者なほいんとくしやなきならで此薄命このはくめいを  
 憐あはれみてや恵めぐむともなき恵めぐみに浴よくして鹽えん噌その苦勞くらうは知らずといふな

るそは又何處またいづこの誰たれなるにや扱さても怪あやしむべく尊たつとむべき此この慈善家じぜんかの姓せ  
 氏いしといはず心しんじやう情じやうといはず義理ぎりしがらみの柵さこと知るしは唯ひとりお高たかの  
 うば乳母うばあるのみ忍しのびくみつきぎの貢みつぎのものそれからそれと人手ひとでを換かへて誰た  
 れと知しらさぬ用ようじん心むかかたぎは昔いつ氣質いっの一たてとほこくを立たて通とほさする遠慮ゑんりよしんつ心こ  
 痛うおいたはしや右みぎに左ひだりに御苦勞ごくろうばかり世よが世よならばお嫁よめさまな  
 り舅しうとご御ごなり御孝行ごかうかうに御遠慮ごゑんりよは入いらぬ筈はずをと或ある時とき泣なきしに  
 お高たか同おなじく涙なみだになりて私わたしの心こゝろ知るものは和女そなたばかり芳よしさまのこと  
 は思おもひ切きりても御兩親ごりやうしんの行ゆく末すゑが心しんぱい配はいなり明日あすが日ひわが身みえん縁えん  
 に附つきなば兔とに角自由かくじゆうは叶かなふまじ其その時ときたのむは和女そなたぞかし父ととさ  
 まのお心こゝろよく取りとりて松まつぎ澤ざはさまとの中昔なかかしの通とほりにして欲ほし、是これ  
 ひとつがお頼たのみぞとて兩手りやうてを合あはせて伏ふし拜をがみぬ失うせし芳よしの之すけ助けを

悼いたまぬならねど主しゆの身みの上う猶なほさららに氣きづかはしく陰かげになり日向ひなたに  
 なり意見いけんの數かず々く貫くきてや今日けふ此この頃ころの袖そでのけしき涙なみだも心こゝろも晴はれ  
 ゆきて縁えんにもつくべし嫁よめにも行ゆかんと言い出ひいでし詞ことばに心こゝろうれしく七し  
 ちねんご  
 年越ねこしの苦くも消きえて夢ゆめ安やすらかに寝ねる夜よ幾いく夜よある明あけ方がたの風かぜあ  
 らく枕まくらひいやりとして眼め覺さむれば縁えん側がはの雨あま戸ど一枚いちまいはづれて並ならべ  
とこ  
 し床とこはもぬけの殻からなりアナヤとばかり蹴けかへして起たつ枕まくら元もとの  
あんどん  
 行あん燈どん有あり明あけのかげふつと消きえて乳う母ばが涙なみだの聲こゑあわたゞしく嬢ぢやうさ  
 まが嬢ぢやうさまが。

かは  
 渝ちぎらぬ契ちぎりの誰たれなれや千せん年ねんの松しょう風ふう颯さつ々くとして血ち汐しほは  
のこ  
 殘くさらぬ草さ葉ばの緑みどりと枯かれわたる霜しもの色いろかなしく照てらし出いだす月つき一いつべ  
んなん  
 片うら何らの恨とぶらみや吊こゝふらん此ゑん處あう鴛つ鴦かの塚うへの上に。



# 青空文庫情報

底本：「樋口一葉全集第一巻」新世社

1942（昭和17）年1月30日発行

底本の親本：「校訂一葉全集」博文館

1897（明治30）年1月9日発行

1897（明治30）年6月再版

初出：「改進黨新聞」

1892（明治25）年3月31～4月10日、4月12日、14日～17日

※初出時の署名は、「浅香のぬま子」です。

※「提燈」と「提灯」、「脊」と「背」、「小僧《こそう》」と

「小僧《こぞう》」、「平生《ひごろ》」と「平生《へいぜい》」、「恥《はぢ》」と「恥《はじ》」の混在は、底本通りです。

※底本の編者による脚注は省略しました。

入力：万波通彦

校正：岡村和彦

2014年10月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 別れ霜

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>